

話 [K+インタビュー] をしてもいいですか vol.50

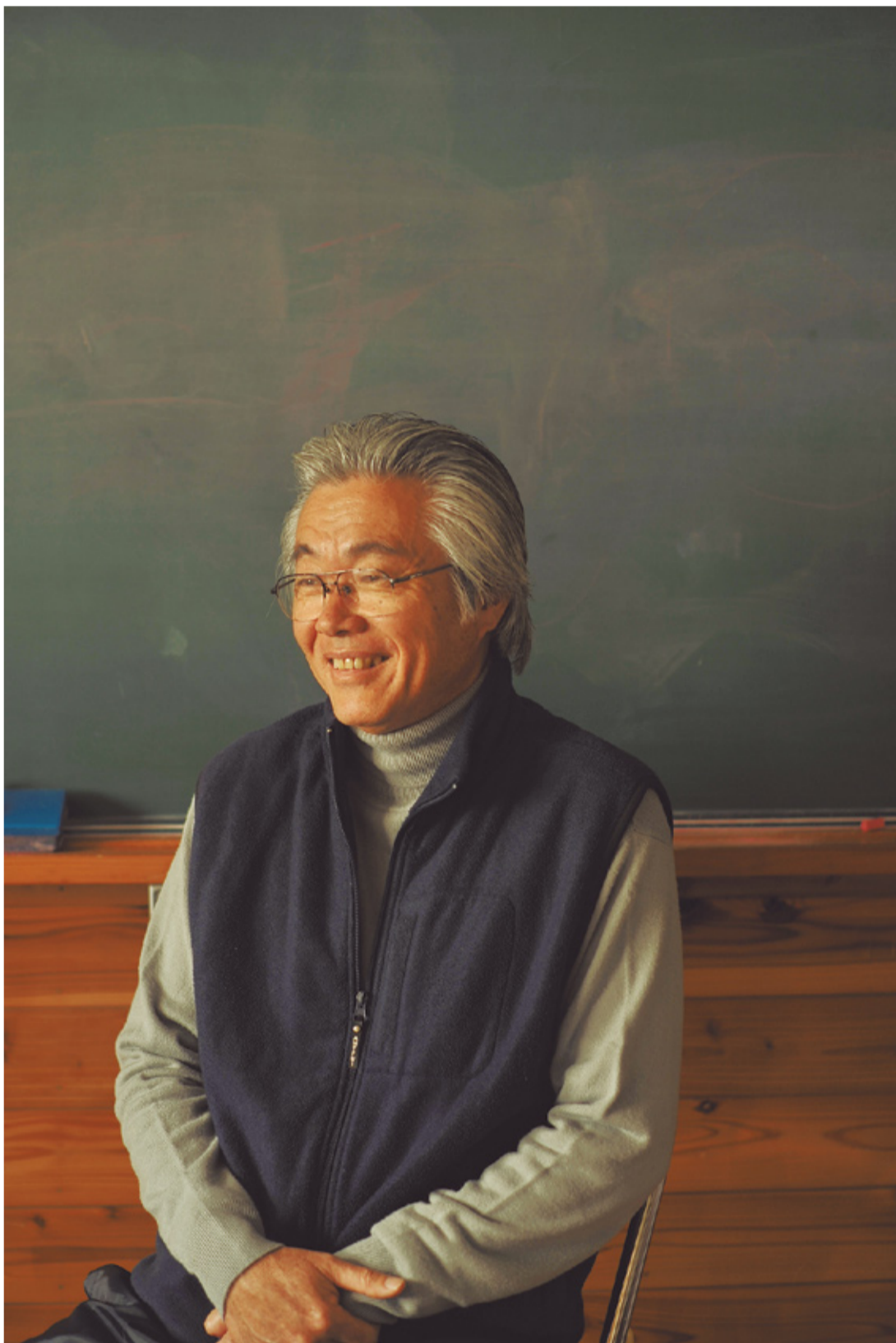
久保慧榮=取材
河上展儀=写真

誰しも、向き合って話を聞いてほしい。

山また山の池川で、フリースクールの園長として。手にした宝物は、有形無形の「ありがとう」。

宇賀 孝敏
Takatoshi Uka

「仁淀川町池川自然学園」園長。旧春野町出身。これまでに延べ358人の山村留學生を送り出してきた。4人兄弟で育ち、子ども4人。



「いろいろな季節を刻んだ学園の思い出達に僕らの「におい」をつけた。平成16年に巣立った子たち6人が寄せ書きした詩の「節」である。彼らは今年、成人式に全国各地から集まった。「その様子を見て初めて、安心できました」と宇賀園長がつぶやく。ここに泊まり、朝食の茶わんを懐かしがり、久しぶりのみそ汁を味わってほっとする子たち。意外なところの子どもの思い出はあると気がつき、うらやましくもなると話す。

学園は静かな山間部にある。茶畑の中を細い道がカーブを描いて上へと登ってゆく。この園で預かるのは、さまざまな事情で不登校になった子たち。ともに生活しながら学ぶ、フリースクール。山村留学の事業と複合しているのは全国的にも珍しい。多いところは年間30人を超えたが、本年度の利用者数は9人までに減った。1カ月以内の短期留学から、3年間じっくり過ごす子もいる。最近の留學生は9割以上が県内からだ。

創立者で教員だった義父から誘いを受け、18年になる。30代後半に、サラリーマンの営業職から転職。「のんきだった」。怖いもの知らずで飛び込んだ。生活環境や新しい人間関係に不慣れな子どもばかり。就任1カ月でトラブルの多さに崩れかけた。単身赴任で、わが子4人とは離れた暮らしが続き、1人が不登校になった時期もあった、と聞いた。分かっていても思うようにできない子どもの叫びを聞くには、「一人一人と向き合うしかない。」「僕を見て、私を見て、話を聞いて」。周囲の大人の決めつけで、理解されない体験を積み重ねてきている子たち。「わが子の悩みに、向き合うことはなかったでしょうね」。

自分の弱さをとことんさらして、青春を燃やした子もいる。やっと出会った居場所といずれ離れる、耐え難い怖さと、寂しさ。一期一会、思いが通じた体験は、その子の歩いてゆく道に残るだろう。学園では学習以外にも年間を通じた実習が多い。川遊びにサイクリング。ヤギやウサギの餌を取りに行く。恵方巻きも作る。道路のカーブミラー磨き。大人の目で見ると、これを全部やったら何て楽しいのだろう。宇賀園長がそうだったように、職員も外での経験がここでは通用しない。それが学びとなり、成長となる。園長は、学園が子どもたちを支援する場であるとともに、地域との交流の場であるように願っている。そして、ここで過ごした子たちが、周りにいる大切な人の、気持ちの動きを読み取れるようになることを。

INFO 「仁淀川町池川自然学園」(財団法人仁淀川町ふるさと体験センター)
香川郡仁淀川町竹ノ谷612 TEL0889-34-2110 <http://www.inforjyoma.or.jp/ikegaku/>